

有する人物で、中にも福壽草の如きは多趣多様、殊に高價な逸品と稱すべきものがあつて、其の栽培には非常なる注意を以てして、其の所有には比儔の稀なものが多いと云ふ事である。

■古在博士の奇譚

農學博士の古在由直氏が、先年文部省から獨逸に留學を命ぜられて、彼國に滞在中は何日もポロ／＼に成つたフロツクコートに少しも鑊を當てない毛立つた帽子を冠つて、平氣で市中を歩いてゐたから、友人間では氏の帽子を棕犬の絹帽と稱へてゐたさうだ。

ところが其頃今の法學博士の岡田朝太郎氏が、巴里から一緒に歸朝しやうと言つて來たので、古在氏は急に歸朝する氣に成つて、直様下宿の荷物を片付けて、例の棕犬のシルクハットを冠つて花の都の巴里に堂々と遣つて來た圖は實に珍妙素敵なものであつたと云ふ事ぢや。

■田中館博士と耐震家屋

理學博士田中館愛橘氏はかつて、理科大學の學生時代に藤澤利喜太郎氏、田中正平氏と鼎立して三奇人と稱へられてゐた丈に、氏の

卒業後にも奇談は随分多い。

性來が淡泊の人物で學術研究の爲には一身を献ぐる篤學者であるから、風采などには頓と無頓着で、儀式の時に着用するフロツクコートさへ羊羹色を帯びて居ると云ふ始末。

往年學術取調の命を受けて根室に出張してゐた時の事である、恰も其頃に近藤廉平氏が根室に来てゐたが、田中館氏が此地の耐震家屋に籠つて熱心に地震に關する研究をして居る模様を見るべく博士を訪ふた事がある。

スルト、博士は此時その座敷の真中に洋服を着たまゝ、大の字に寢

轉むで、凝つと考へ込むでゐたが、來客の音に氣付いて起き上りながら、シゲくくと近藤氏の一行を見て。

『やあ、近藤さんか？』

と挨拶して、一行を室に通して款談したと云ふ事で、流石無邪氣で、篤學の有様には一行も感じ入つたと云ふ事だ。

聞けば、氏は當時たゞ一人、此の山寺の様な耐震家屋に引籠つて二十日あまりも住み込むで、食物は日々根室の旅宿から運ばせて、専心一意その研究に従事してゐたのぢや相だ。

藤澤博士の綽名

田中館博士と共に理科大學學生時代に三奇人の一人と稱へられた藤澤利喜太郎が、學生の寄宿舎に同窓の豪傑と怪癖奇癖を揚げてゐた頃、學生間で綽名が流行して、其友人の市島謙吉氏は顔色が其頃瓢箪のやうに青かつたと云ふ所から青瓢箪と稱へられ、議論横生の故山田一郎は口から先きに生まれたかの様に喋舌り立てるので喋々子と綽名され、藤澤氏其人は色の黒いと云ふ特長から割り出されて小鳥と云ふ尊號を奉られてゐたといふ。

旅館で冷遇された黒板博士

文學博士の黒板勝美氏は頗る仙骨を帯びた學者で、然かも中々に喰へない人物だ、先年信州上諏訪の一旅館に止宿した。

所が氏の風采態度が餘りに粗末なので、旅館では非常に見縊つて下等な部屋に通した、スルト、氏は直に部屋の取變へを命ずると旅館では兎も角、部屋だけは取り換へたが、待遇は舊の如くに冷淡で、碌な副食物は無かつた、しかし、飯米だけは上等米であつたから、氏は十二杯も平らげて旅館の給仕を驚かした相だ。

かくて、氏は翌日出發すると云ふ時に成つて、番頭を呼び付けて
 「此家は待遇が悪いから茶代を置かぬ！ 女中に心附も遣らぬ！
 しかし、飯の炊き方は如何にも上手ぢや、此上とも大切にしてい
 遣れ！」
 と言ひ終つて、飯炊へと言つて心附を置いて、悠悠然と立ち去つ
 た。

■ 老女學生然たる嘉悦女史

女子商業學校長の嘉悦孝子女史が、先頃麴町の二松學舎に通つて

三島翁の漢學聽講に行つてゐた姿は、粗末な綿服に大きな本の包を
 抱へて、テク／＼と歩いて行くので、其の老女學生然たる態度に、
 其の經營する學校の生徒は非常に感憤したさうだ、近頃も相變らず
 御通學か何うか其邊は耳の長い拳骨坊も流石に聞き漏らしたが、女
 史はまた毎年暮の餅搗に成ると、學校の寄宿舎で盛んに搗くが、然
 かも男手一つ借りる譯でなく、大きな杵を持つて、女史が先に立つ
 て搗くのぢや相だ。

■ 大蛇と綽名さるゝ塚田代議士

埼玉縣選出の代議士塚田啓太郎氏は、風采の質朴な田舎爺に宛然だ、選挙区には非常の信用がある、氏が談論に花を咲かす時にはベロ／＼と舌を出して喋舌る癖があるので、大蛇と云ふ綽名がある。先年普通選挙案の出た時に、氏は其の提出者の日向輝武氏の討論のあとで反対演説を遣つた、スルト、日向の蛇の後に塚田の大蛇が出たと云ふので大評判であつた、日向氏夫妻が揃も揃つて蛇の好きな事は、読者が先刻御承知の事と思ふから、今更註釋を加へるに及ぶまい。

現代名士の逸話終

大正十三年二月五日印刷
大正十三年二月廿日發行

定價金八十錢

著者 鈴木邦洋

發行者 東京市淺草區新谷町十七番地 二見新治郎

印刷所 大阪府南區松屋町四番地 法令館印刷工場

不許
複製

發行所

東京市淺草區
新谷町一七
大阪府南區
松屋町三九

丸龜書店
榎本書店

振代 三四八二 電話東一七九五 一六三四

福來文學博士題字
吉川南湖著

青年
修養 教への泉

三六版装幀箱入
定價金八十錢
送料金六錢

先哲は吾等に何を訓へ、先人は吾等に何を説くか、古
往今來の人格者によりて垂示された格言、道話、和歌、
俳句、逸話等をあつめて本書を爲す、即ち此教への泉
より吾等が魂の糧を汲みわけられむことを、此書を切
に薦むる所以亦是にあり。

291
637

終